

第三章 遺跡の概要

1 大湯環状列石について

昭和59年度から平成20年度にかけて史跡の性格解明を目的に発掘調査が行なわれている。その成果は下記のとおりである。地区ごとにその成果を記載するが、地区名は報告書（I）で設定した範囲とする。

◆万座・野中堂環状列石とその隣接地（D1～8区、B1～4区）

万座環状列石隣接地及びその周囲の遺構分布が明らかにされている。

環状列石は、これまで二重の円環状に配石遺構が配置されたものとされていたが、万座環状列石においては外帯から延びる石列（出入口状の施設）、内帯と外帯を結ぶ石列のほか、これまで空白とされていた内・外帯間から4基の配石遺構が発見された。さらに環状列石を中心に掘立柱建物、土坑・フラスコ状土坑、遺物廃棄域が同心円状に分布していることが明らかとされた。

環状列石を取り囲む掘立柱建物は数棟で構成された群となり、水野正好氏らによって分割された外帯小塊に対応することが看取された。掘立柱建物は方形（I類）、六角形（II類）などの柱配置を示し、列石側に方形、その外側に六角形の掘立柱建物が配置されるといった規則性を持ち、その長軸方向は列石の中心を意識した配置を示すものであった。

なお、環状列石を取り囲む掘立柱建物の存在は、伊勢堂岱遺跡環状列石Cの発見の契機となった。

野中堂環状列石隣接地並びに周辺については、遺跡保存のため列石西側・南側を調査したのみであるが、万座環状列石と同様の遺構分布を示していることが明らかとなっている。これらの遺構は、主に後期前葉に構築されたものであるが、後期中葉のものも存在する。

◆万座環状列石北側地区（F1～F5区）

万座環状列石を意識して配置された遺物廃棄域の外側から台地北側縁までの範囲である。

環状配石遺構は万座環状列石の周辺とその北側に分布する。野中堂環状列石側においては確認されていない。15cm～30cm程の細長い川原石の長軸を連結し円形に並べたもので、環帯の石が複数列となるものや砂利を一定の幅に敷くものもある。直径28m～3.4mを測り、大型・中型・小型に分類することができる。環内に地床炉又は石囲炉、柱穴を有し、環外に方形の張出施設を付設したもので覆屋施設が想定される。出土遺物から後期中葉と考えられるもので、重複から二時期に渡ることが判明している。

北端で確認された環状配石遺構が最も大型で長軸28m×短軸20mを測る。一部未確認であるが石列の内側に沿って等間隔に並んだ柱穴状ピット、中軸線に対して対となるように石囲炉が配置されている。

小型～中型のものは万座環状列石の遺物廃棄域北側に分布する。6基が直径70mの環状に、しかも各々の張出施設が円環の中央を向くように配置されているが、その中心となるものについては確認できなかった。

性格については、関東・東北南部で検出されている柄鏡式堅穴住居との形態的な類似性から住居としての機能を持つものではないかとの指摘もあるが、同一地域・時期に堅穴式と平地式の住居が共存する例が少ないこと、遺構内に造られた石囲炉には特殊な形態を持つものがあること、遺構内外より日常什器以外のものが多く見つかることから、住居とは別の用途を持った施設と考えられている。

また、万座環状列石北側では直径54mの円環を描くように配置された9棟の掘立柱建物が確認された。Ⅱ類の掘立柱建物が長軸を連結するように配置され、南側にⅠ類の掘立柱建物が付随している。Ⅱ類掘立柱建物は、環中央から放射状に放たれた求心線に対して長軸が直交するように配置され、数例であるが隣接する同時期の土坑を伴うものがある。

本地区の掘立柱建物跡は出土遺物から、万座・野中堂環状列石の掘立柱建物より先行するものと考えられている。

また、万座環状列石北西側の台地縁からは、平地式の5本柱の掘立柱建物が確認されている。主柱を取り囲むように補助穴が巡らされ、東側には出入り口状の開口部を持つ。遺跡内から検出された掘立柱建物の中でも特異な形態を持つことから、祭祀的な要素の強い遺構と考えられている。

◆万座環状列石西側地区(調査区D9区・F1区・G3区)

万座環状列石の西側に入り込む大きな沢を挟み、台地の縁に沿って二つの竪穴住居群(F1区=5棟・D9区・G3区=9棟)と野中堂環状列石隣接地に2棟の竪穴住居が確認されている。竪穴住居同士の間隔は重複はない。平面形は円形を呈し、径2.7m~4.7mを測る。確認面からの掘り込みは非常に浅い。住居中央に石囲炉を持ち、壁際に川原石を「コ」や「二」字状に配置した特殊な施設を持つものもある。構築時期は出土遺物等から後期前葉(14棟)・中葉(2棟)で、中葉の住居からはまとまって土器が出土するという特徴を持っている。

北東北・北海道に所在する環状列石では、列石に伴う竪穴住居跡の発見例が報告されているが、大湯環状列石から最も多い。

なお、環状列石から離れるに従い遺構や遺物の分布密度は薄くなる。

◆万座環状列石南側地区(G1区・G2区)

万座環状列石を意識して配置された遺物廃棄域の南側の範囲。昭和38年・39年当時、すでに配石遺構の存在が知られていた場所で、昭和43年、阿部義平氏によって『考古学雑誌第54号第1巻』で紹介された。苗圃、その管理事務所として使用されていたことから攪拌を受け、上部配石を欠くものがあったが、弧状に配置された6基の配石遺構が確認されている。また、G1区中央の微高地からは9基のフラスコ状土坑がまとまって確認されている。

◆野中堂環状列石南側地区(B2区・H1区・H2区)

野中堂環状列石の南側から史跡指定地南端に及ぶ範囲。調査によって野中堂環状列石南側の出入り口状施設の延長線上から、配石遺構や配石列が確認されている。構築時期は後期前葉と考えられている。しかし、主にトレンチによる調査であったことから正確な遺構・遺物分布を把握できなかったが、ボーリング棒探査を行ったところ配石遺構として認定できるものは確認できなかった。環状列石から離れるに従い遺構や遺物の分布密度は薄くなる。

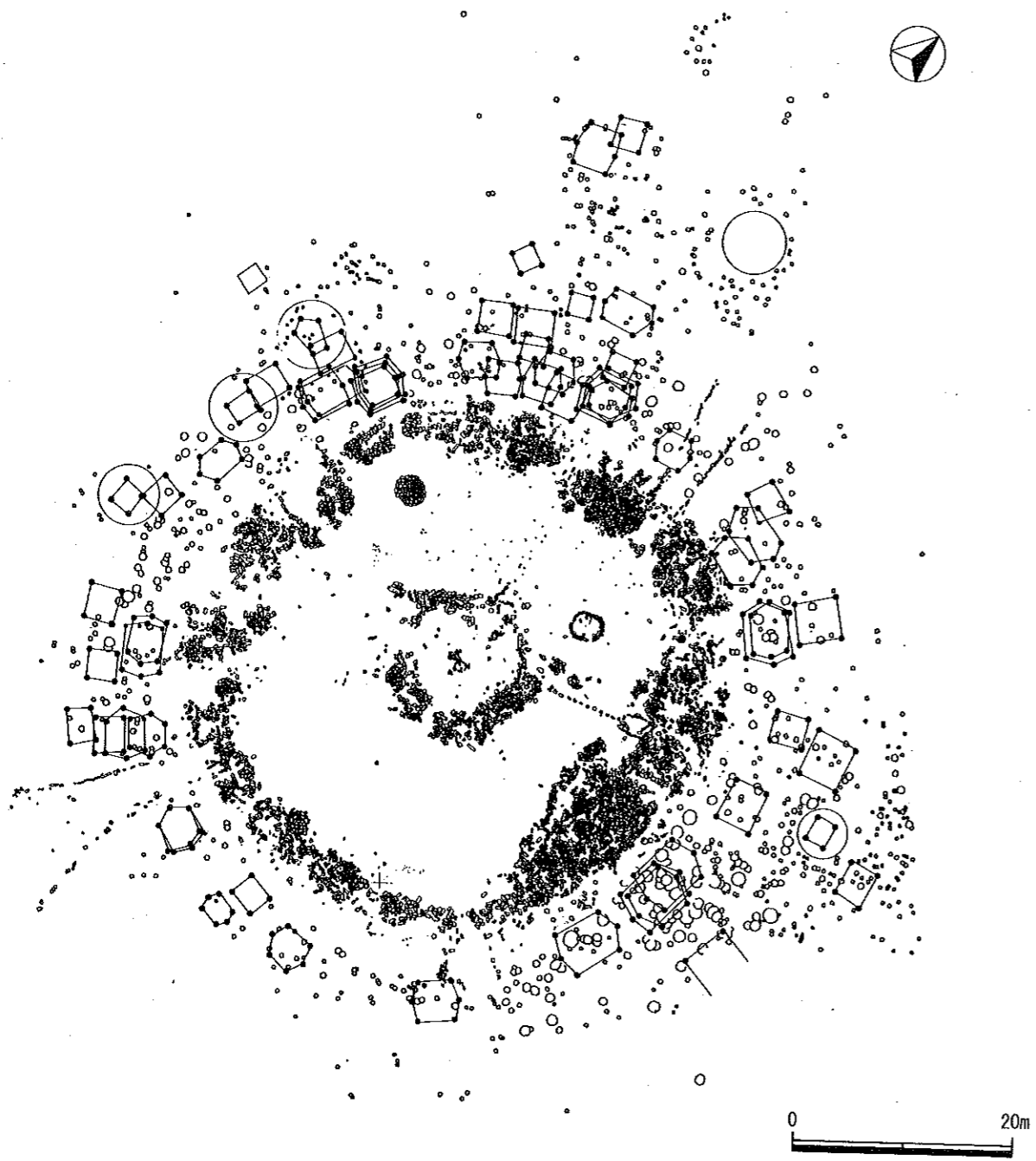
なお、浅間神社の脇、さらに野中堂環状列石南東側隣接地をとおり、大湯ストーンサークル館へ通じる古道が確認されている。これは『鹿角市史』で紹介されている「殿様街道」と言われる巡検使道である。

◆一本木後口地区(A1区~A8区)

野中堂環状列石の東側の範囲を指す。昭和49年~51年の詳細分布調査によって配石遺構の存在が知られていた。一本木後口配石遺構群と呼ばれるもので、弧状に配置された配石遺構群である。平



第3图 調査区位置图



第4图 万座环状列石实测图



第5図 野中堂環状列石実測図

本)、六角形(6本)、多数の柱穴状ピットが円形に配置されるものなどがある。

C 柱穴列：同規模の柱穴状ピットが3個以上、等間隔に並んだもの。

④. 竪穴住居跡

平面形態は円形を呈するものが多い。規模は様々である。地面を掘りくぼめ、その内部に炉がつくられるもの。屋内外に屋根を支える柱穴を持つ。

⑤. 竪穴遺構

平面形態・規模は竪穴住居跡に類似するが、炉跡などが検出されないもの。

⑥. 炉 跡

a 石囲炉：川原石を円形、方形などに組み合わせたもので、その内部に火を焚いた痕跡を残すもの。

b 土器埋設炉：土器を埋設し、その内部で火を焚いたもの

⑦. 焼土遺構

石囲炉や土器埋設炉のように区画する施設を持たず、地面に加熱された痕跡が残るもの。

⑧. 土 坑

a Tピット：平面形が長楕円形、断面形がV字・U字状を呈するもので、「トラップピット」・「陥し穴状遺構」と呼ばれるもの。

b フラスコ状土坑：土坑の口径部より底部が広い土坑で、深さは様々である。「袋状土坑」と呼ばれている土坑や掘り方が歪で「長靴状」を呈するものも本類に含めた。

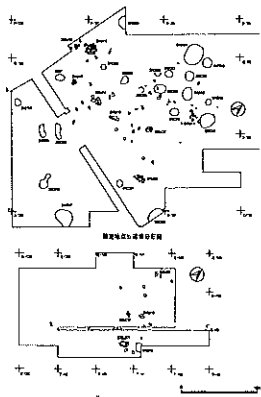
c 土坑：地面を掘り窪めた穴。平面形は円形、楕円形、方形を呈し、断面形は箱型・逆台形状を呈する。

⑨. 土器埋設遺構

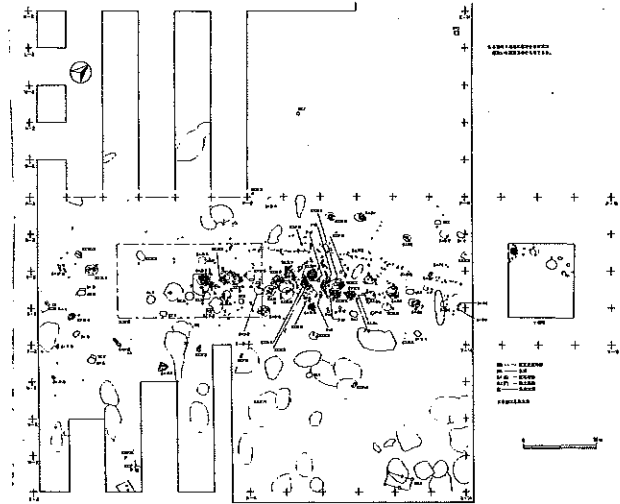
小土坑に土器を埋設したもの。

第6表 各地区の遺構分布数

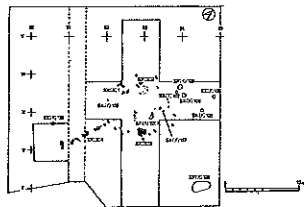
	遺構数	万座環状列石					野中堂環状列石			一本木 後口	史 西	跡 側	遺 南	跡 側
		環状 列石	隣接地	北側 地区	西側 地区	南側 地区	環状 列石	隣接地	南側 地区					
1. 環状列石 (配石遺構数)	2 (160)	1 (105)	0	0	0	0	1 (55)	0	0	0	0	0	0	
2. 配石遺構														
(1) 環状配石遺構	13	0	4	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
(2) 方形配石遺構	4	0	3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
(3) 配石遺構	111	3	10	25	0	7	0	0	3	60	0	3		
(4) 集石遺構	13	0	0	13	0	0	0	0	0	0	0	0		
(5) 配石列	17	6	4	2	0	0	2	0	1	1	0	1		
(6) 立石遺構	12	0	10	2	0	0	0	0	0	0	0	0		
3. 柱穴状ピット・ 建物跡・柱穴列														
(1) 柱穴状ピット	2,611	0	1,633	286	24	4	0	653	0	8	3	0		
(2) 掘立柱建物跡 (I類) (II類) (III~IX類)	100 (34) (53) (13)	0	65 23 32 10	16 6 9 1	2 0 1 1	0	0	17 5 11 1	0	0	0	0		
(3) 柱穴列	3	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0		
4. 竪穴住居跡	16	0	0	5	9	0	0	2	0	0	0	0		
5. 竪穴遺構	5	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	0		
6. 炉跡														
(1) 石囲炉	23	0	5	16	0	0	0	2	0	0	0	0		
(2) 埋設土器炉	6	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0		
7. 焼土遺構	340	0	50	71	32	2	0	36	47	96	5	1		
8. 土坑														
(1) Tピット	66	0	13	31	13	3	0	6	0	0	0	0		
(2) 土坑	486	0	240	101	13	3	0	105	0	20	4	0		
(3) フラスコ状土坑	298	0	151	56	9	11	0	71	0	0	0	0		
9. 埋設土器遺構	8	0	5	3	0	0	0	0	0	0	0	0		
計	4,134													



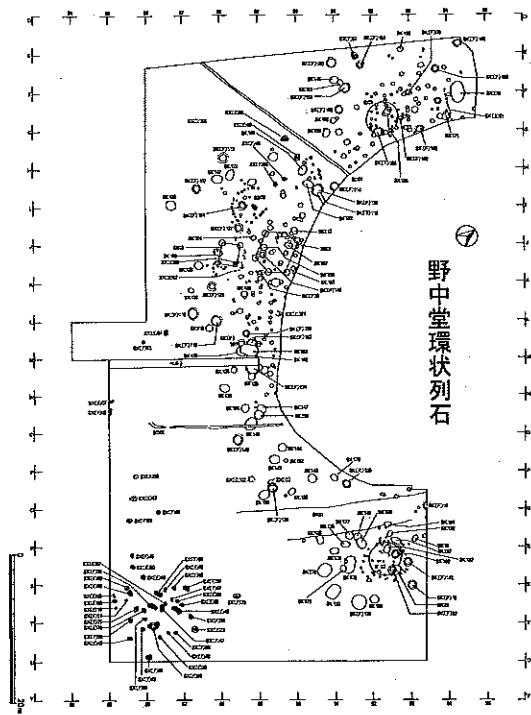
A4区・A5区



A1区~A3区 (一本木後口配石器構群)



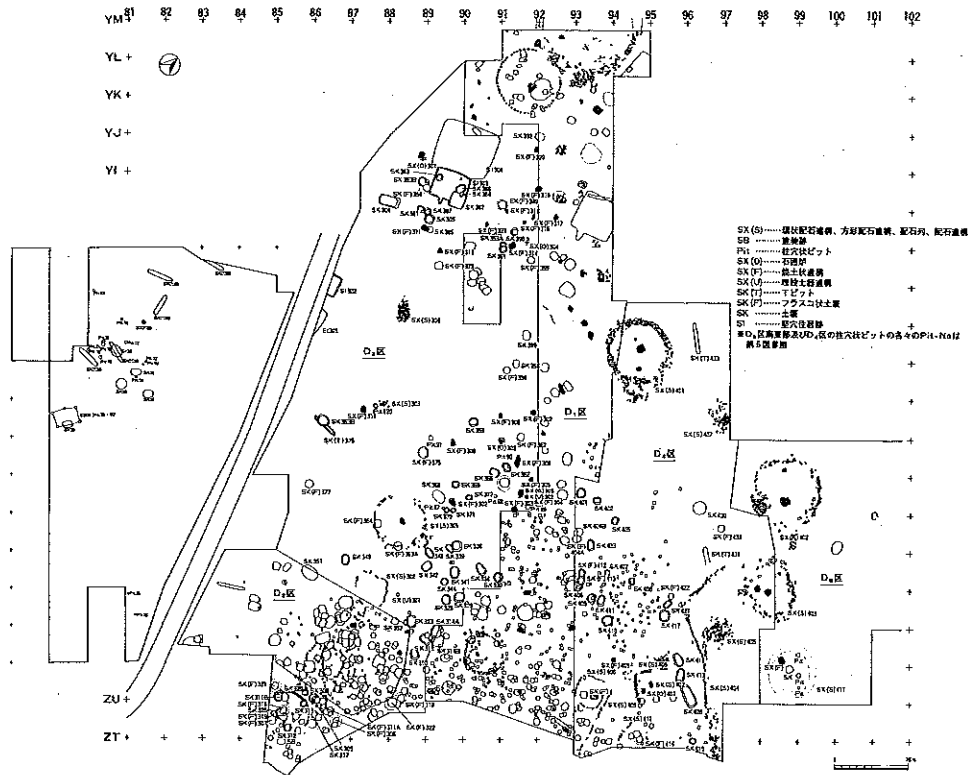
B3区



B2区



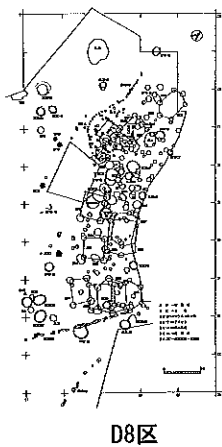
第6図 遺構配置図(1)



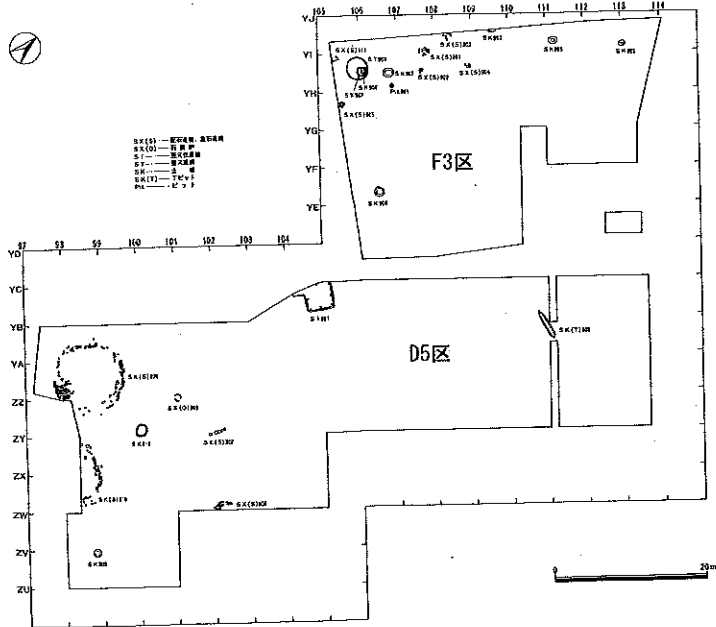
D1区~D5区



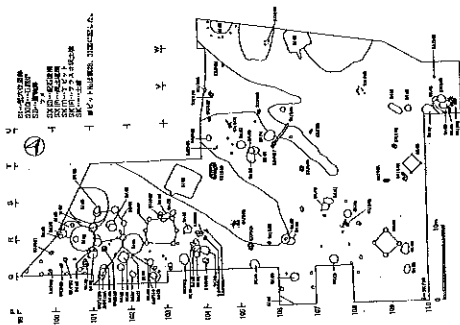
第7図 遺構配置図(2)



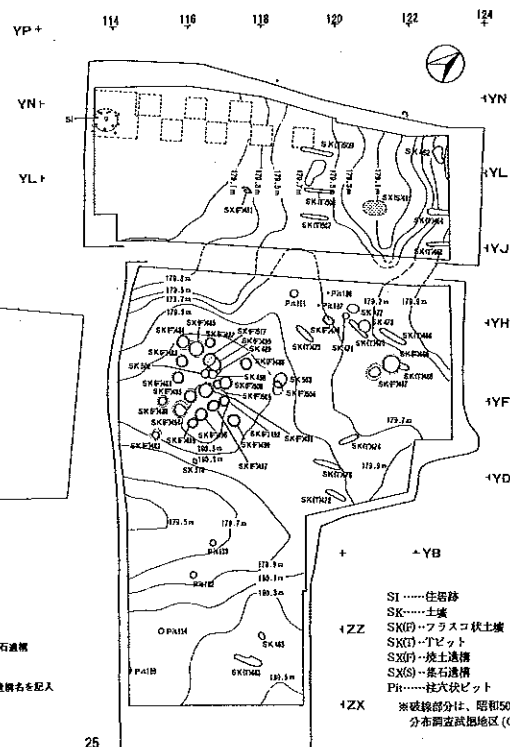
D8区



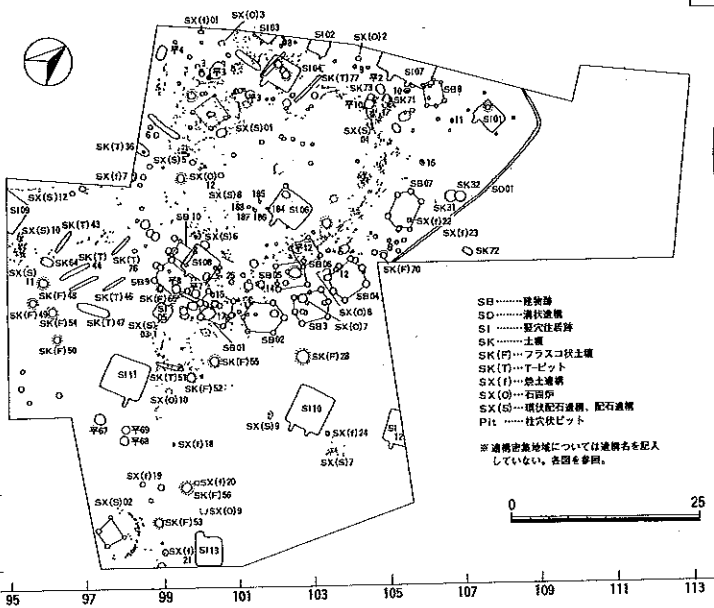
D5区・F3区



F1区



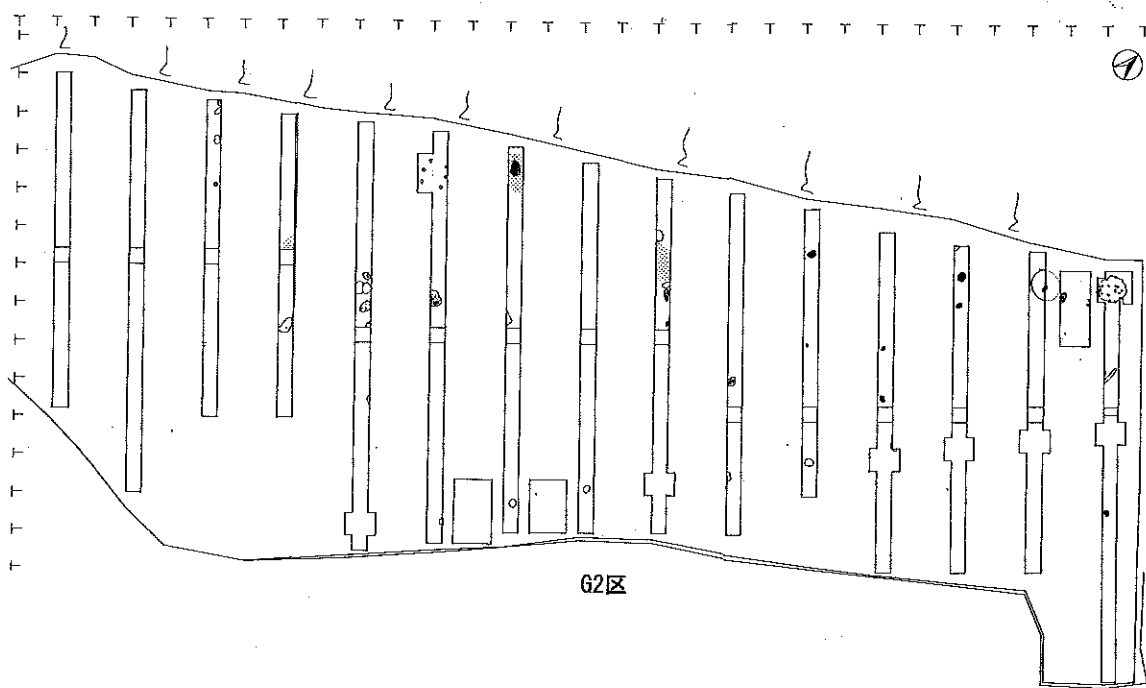
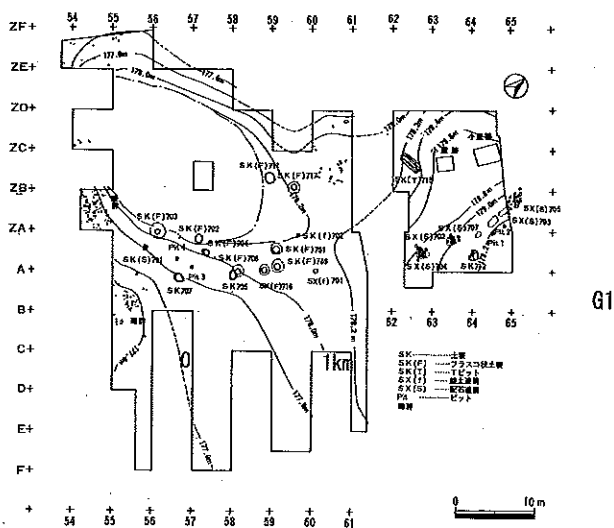
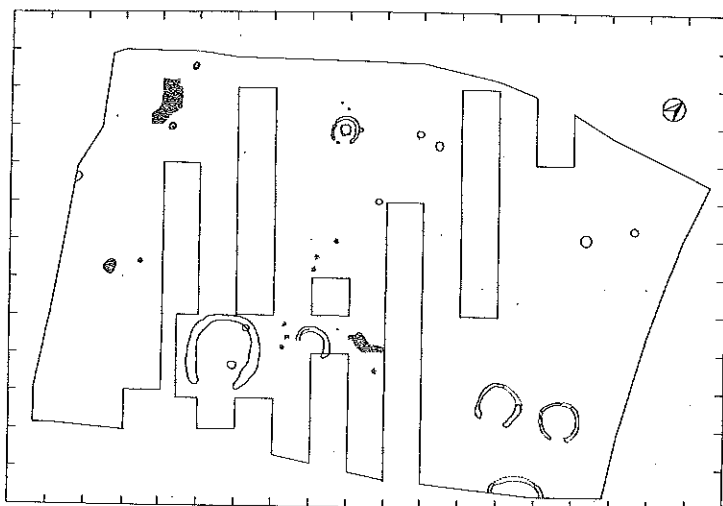
F3区



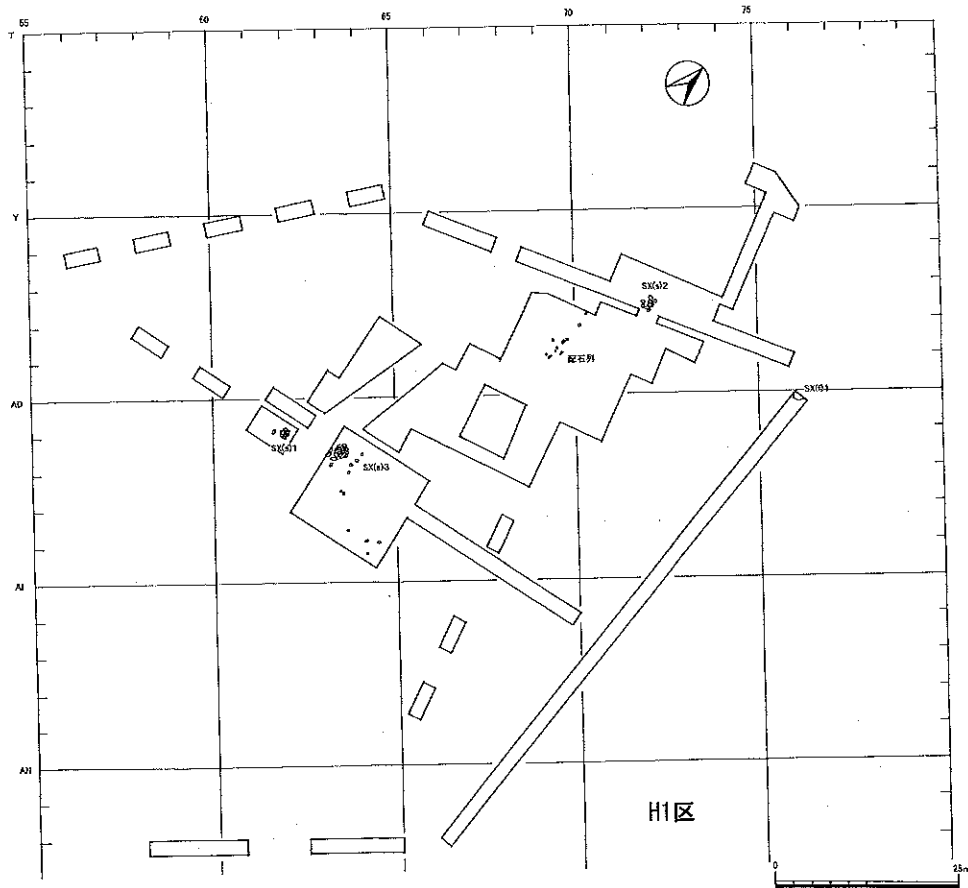
F4区

第8図 遺構配置図(3)

F5区



第9図 遺構配置図(4)



第10図 遺構配置図(5)

3 遺跡の基本層序

遺構及び遺物の検出・出土層は次のとおりである。第11図・12図に各調査区の基本層序と土色を図示した。

第Ⅰ層 褐色土(10YR3/1)～黒色土(10YR2/1)

表土・耕作土で遺跡全体を覆っている。耕作により攪拌を受けている層と攪拌の及ばない層に分層できる。台地縁より入り込んだ沢地に厚く堆積する。層厚30cm～60cmを測る。

第Ⅱ層 黄褐色火山灰(10YR5/6)

地質学的には「十和田a降下火山灰」と呼ばれている。『大湯町環状列石』報告書では「大湯浮石層」と呼んでいる。十和田火山(湖)を噴出起源とする発泡の進んだ軽石の堆積層で、粒径が大きく・重量のあるものほど下層に、シルト質なものほど上層に堆積し、これによってⅡa層～Ⅱc層に細分することができる。本来は遺跡全体を覆っていたものと考えられるが、耕作によって攪拌を受け消失している場所もある。層厚3cm～15cmを測る。配石遺構や立石遺構については、本層上面でその露頭を確認できる。平安時代の竪穴住居などはこの大湯浮石に覆われ、また、これを掘り込んで構築されており、構築時期決定の鍵層となっている。

「十和田a降下火山灰」については、これまでの調査事例から平安時代中頃、10世紀前半とされていたが、滋賀県比叡山延暦寺の僧侶が残した『扶桑略記』の記事から、この噴火は延喜15年7月とも言われている。略記第廿三 裡書(延喜十五年二月一十七年十二月)のなかに「十三日。出羽国言上雨灰高二寸諸郷農桑枯損之由」とその被害の様子が記されている。噴火と同時に流出した火砕

流(毛馬内軽石質火山灰または毛馬内火砕流)は大湯川・米代川を下り、大館地区・鷹巣地区では家屋(現 北秋田市胡桃館遺跡)を飲み込みながら能代平野まで達している。北秋田郡比内町(現 大館市)の本道端遺跡では最大で95cmの火砕流の堆積層が観察されている。鹿角市草木地区に残された「伝説 八郎太郎」には「山仕事の際、食事当番となった若者が仲間の食べ物を独り占めし、その罰として竜に化身し、大湯松宮地区で南祖坊に敗退し、八郎瀧まで逃げ延びていく」様子が伝え

られている。火砕流と八郎太郎(竜)が辿った経路はほぼ一致することから、この自然災害を後世に伝えるために説話として置き換えられた伝説とも言われている。

第Ⅲ層 黒色土(10YR1.7/1)～暗褐色土(10YR2/3)

黒色土、黒褐色土、暗褐色土を基本的な堆積とする層である。土色・混入物・シマリ(粘性)からⅢa層～Ⅲc層に細分することができる。また、遺跡が広大なためこの層間に間層を挟む地域もある。

Ⅲa層 黒色土(10YR1.7/1～2/1) 混入物をほとんど含まないシルト質の堆積層である。堆積土中で最も硬くしまっている。遺跡ほぼ全域にみられ、層厚5cm～10cmを測る。

Ⅲb層 黒色土(10YR2/1) Ⅲa層と土の粒径や色彩とも同一であるがⅢa層と比べしまりはない。遺跡のほぼ全域に分布する。遺物包含層であるが下位のⅢc層より遺物の出土量は少ない。

Ⅲc層 暗褐色土(10YR2/3) 上下層に挟まれたシルト質の堆積層である。層厚5cm～10cmを測る。環状配石遺構のように構築時期が後期中葉に位置づけられるものは本層を構築面としている。遺物包含層で後期中葉の土器が含まれるが下位のⅢd層より出土量は少ない。

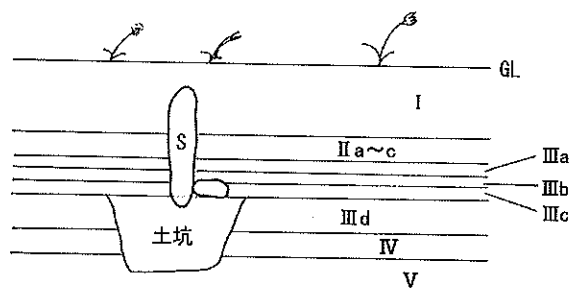
Ⅲd層 黒褐色土(10YR2/2) 褐色土や黄褐色土の小さなブロックや粒子を含んだ層で、層厚10cm～20cmを測る。遺構構築時期が後期初頭～前葉のものは本層を掘り込み構築される。また、遺物包含層でもあり下位に移るに従い遺物量は減少する。

Ⅳ層 褐色土(10YR4/4)

第Ⅴ層のブロックや粒子を多量に含んだ層である。層厚10cm～20cmを測る万座環状列石南側隣接地では削平され、Ⅲd層下に第Ⅴ層が見られる。このことから万座環状列石構築に伴ってある程度の整地が行われていたと考えられている。

第Ⅴ層 黄褐色土(10YR5/6)

十和田火山(湖)を噴出源とする火山灰層である。地質学的には「申ヶ野火山灰層」と呼ばれている。遺跡周辺では層厚1m～2mに達する。掘り込みの深いフラスコ状土坑やTピットは本層を突き抜けているものもある。本層下には、この台地の基盤を構成するシラスと礫層(鳥越軽石質火山灰層)が存在する。



第11図 遺跡の基本層序